

総合選択制高校・総合学科における科目選択の実証的考察

—3校における観察をもとに—

お茶の水女子大学大学院 田中 葉

1. はじめに

現在、「個性化」・「多様化」をキーワードに高校教育改革が進行している。これまで日本の高校は画一的なカリキュラムのもとに学校階層構造を形成し、生徒を学力に応じて振り分ける選抜・配分の機構となってきた。しかしこうした高校教育の在り方は、生徒の特性を無視するものと批判され、臨時教育審議会以降、高校は個々の生徒の興味・関心に応じた学習や進路形成を保証する機関に転換していくことを要求されてきている。

この際に改革の目玉として注目を集めたのが、科目選択制を導入する総合選択制高校・総合学科である。多様な選択科目から興味・関心や希望進路に応じて時間割を組めるシステムは、高校における学習内容や進路選択の在り方を変革する新機軸として期待を集め、現在なおも盛んに設置されている。

しかし、これらの高校で、生徒はどのような科目選択・進路選択を行っているのだろうか。学校側はどのような科目選択指導・進路指導を行い、生徒はそれをどのように解釈しているのだろうか。はたして、生徒は学校ランクによって水路づけられていた進路選択とは異なる進路選択を行うようになっているのだろうか。

本研究はこのような関心から、前身・生徒の学力・設置系列の異なる3つの高校で、①学校の科目選択指導・進路指導の在り方、②生徒の科目選択・進路選択の在り方にどのような傾向が見られるか検討し、高校の選抜・配分システムがどのように変化しつつあるか考察することを目的とする。

2. 調査の対象・方法

1. 調査の対象校

本研究が対象とした3校の特徴は下記の通りである。

総合選択制高校A校…1984年、全国で初めてつくられた先導的総合選択制高校。新しいタイプの高校の象徴的存在となり、現在の総合学科のモデルになった。人文・理数・語学・体育・芸術・家庭・商業の7学系を設置。学力レベルは高校受験時の偏差値にして61程度。

総合学科B校…底辺校的な専門高校を前身とする。1994年度に全国に先駆けて総合学科化した。設置系列

は生物資源、エコロジー、機械技術、メカトロニクス、食物栄養、アパレル、国際流通、ビジネスの8系列。生徒の学力は、およそ高校受験時の偏差値にして54程度。

総合学科C校…底辺校的な普通科専門学科併置校の跡地にたてられたが、教員も総入れ替えとなり、ほぼあたらしい学校としてスタートした。設置系列は、情報システム、国際ビジネス、語学コミュニケーション、芸術・文化、自然科学、社会・経済の6系列である。生徒の学力は、およそ高校受験時の偏差値にして57程度。

II. 調査の内容

1) 科目選択指導場面・進路指導場面の観察

3校において、科目選択指導を体系的に行う授業（A高校においてはLHR、B高校、C高校においては産業社会と人間）を継続的に観察した。

A高校…98年の5月～9月

B高校…98年5月～9月、99年4月～7月

C高校…98年7月～12月、99年5月～7月

また、ガイダンスセンターで行われる個別の進路指導場面も観察した。

2) 生徒に対するインタビュー

観察中、随時、生徒に聞き取りを行ったが、補足的に生徒対象のインタビュー調査も実施した。

インタビュー対象者は下記の通りである。

A高校…1年生10人 2年生6人 卒業生6人

B高校…1年生25人 2年生21人 3年生18人

※3年生については昨年度進路が決まった時点で実施

C高校…1年生16人 2年生9人 3年生17人

※3年生については昨年度進路が決まった時点で実施

3. 調査結果の要約

a. 入学当初の進路展望、選択科目への展望

まず、生徒たちはどのような期待や進路展望・科目選択への展望を抱いて、総合選択制高校・総合学科に入学してくるのか、入学時点で生徒に聞き取りを行った。その結果明らかになったのは、3校とも、自校を圧倒的に第一希望として選んできた生徒が多いことである。また、科目選択や将来の進路に対する考えは、たとえば「将来は女優になりたいので、演劇と音楽を勉強したい（C高校女子）」「音楽と農業とどちらの進路に進むか悩んでいるのでどちらの科目も勉強したい（B校男子）」など、夢にあふれるものであることが判明した。

b. 科目選択指導・進路指導の差違と結果としての生徒の選択科目の差違

しかし、これに対して、学校の科目選択指導・進路指導の在り方は大きく異なっている。

まずA校は、科目に対する制約等で、制度的にもかなり幅の狭い科目選択しか行えないようになっている。また、自由に科目を選べる部分についても、入学当初から繰り返し、大学入試の科目によってパターン化されたモデルプランを参照して科目を選択をすることを積極的に推奨され、結果として聞き取りを行った生徒の大半（12人中10人）が、モデルプランを一部組み替えただけの科目選択を行うようになっていることが明らかになった。生徒はこれに対し、総合選択制高校の理念との乖離を感じ、不満を感じながらも、結局進学への思いを否定できず、あきらめる状況になっている。

また、C校も入学当初から積極的に進学に照準を合わせた科目選択指導、進路指導を行っている。A校ほど制度的な制約があるわけではなく、生徒の中には、入学当初からの夢を継続し、それにそった科目選択を貫く生徒もいるが、それでも入学当初から見て、進学の方に卒業後の希望進路がシフトする傾向が見て取れる。

これに対し、B校における科目選択指導の在り方は、A校、C校のものとは大きく異なっている。B校における科目選択指導・進路指導プログラムは、授業体験や職業実習などさまざまなプログラムが組みこまれている。進路指導に際しても、どの進路が望ましいというメッセージが発されることはいっさいなかった。科目選択指導に際しては、系列に沿った科目選択をとるようということはいわれるが、それもそれほど強く指導されるわけではない。その結果、面白そうな、興味引かれる科目を選択する生徒も少なからずいることがわかった。

なお、実際にA校の生徒とB校の生徒がどれだけ異なる科目選択を行っているか図1、図2に提示する。図はどれだけ教科にまたがって科目を履修したか示したものである（A校についてはコンピュートルームから生徒の履修科目をもらって分析した。B校についてはインタビューに答えてもらった生徒の選択科目を入力した）。A高校の生徒の選択科目にはほとんど5教科の科目が入っているのに対して、B高校の生徒の選択科目は5教科の科目が少なく、5教科以外の科目が多岐にわたって入っていることが読みとれる。

図1 A校生徒の科目選択状況 N=122

5教科と5教科以外のクロス表

総和の%		5教科以外				合計
		.00	1.00	2.00	3.00	
5教科	2.00	.8%	5.0%	5.8%	.8%	12.4%
	3.00	15.7%	19.8%	8.3%	4.1%	47.9%
	4.00	10.7%	11.6%	3.3%	.8%	26.4%
	5.00	8.3%	4.1%	.8%		13.2%
合計		35.5%	40.5%	18.2%	5.8%	100.0%

図2 B校生徒の科目選択状況 N=48

5教科と5教科以外のクロス表

総和の%		5教科以外					合計
		1.00	2.00	3.00	4.00	5.00	
5教科	.00				2.2%		2.2%
	1.00	2.2%					2.2%
	2.00	4.3%	8.7%	6.5%	2.2%	2.2%	23.9%
	3.00	15.2%	23.9%	8.7%	2.2%	2.2%	52.2%
	4.00	6.5%	2.2%	2.2%	4.3%		15.2%
	5.00		4.3%				4.3%
合計		28.3%	39.1%	17.4%	10.9%	4.3%	100.0%

c. 進路選択

このような科目を履修し、生徒たちは進路選択を迎えることになるが、やはり科目の選択状況に対応して、A校、B校、C校の生徒の進路選択に差違が見られる。A校の生徒は進学するものが多いのに対して、B校では科目の制約がない専門学校に進むものが多く見られる。

表1 学校別進学状況(%)

	A校	B校	C校
4年進学	38.3	18	23.1
短大進学	12.7	21.3	9.3
専各進学	11.7	45.1	26.2
就職	2.6	13.9	4.4
未定(浪人含む)	34.7	1.6	36.9

しかし、ここで指摘したいのは、B校で、専門学校に進学した生徒に、不本意な進路選択を行ったと答えた者が少なからず見られたことである。これらの生徒は途中で大学進学に変更したが、科目の都合上変更できなかったという。また系統性のない科目を履修したため、出口としての進路に接合を見いだせず、進路未定者になった生徒も見られた。このことは一種のカリキュラムトラックが生起している可能性を示している。

4. 結論

本来、総合選択制高校・総合学科は学校ランクに規定されない進路形成を促進するものであった。しかし、ここで見られたのは、上位の成績を集めた高校と、より下位の成績の生徒を集めた高校の進路指導の差異化・結果としての進路の差異化であった。このように見ると多様化・個性化政策の背後で生起しているのは、上位校と下位校のセグメンテーションであるようにも思われる。